

ルに移住したりで、アキは私の弟の友と結婚したが、夫は間もなく召集になり、朝鮮からフィリピンに転進して戦死した。私の父も郡山分郷開拓団の団長に信任されて一家を挙げて渡満し、アキも同行し、三省省依蘭県に住んだが、間もなく戦争は終わり、ソ連軍の侵攻で汽車も船便も失い、男は戦場に向かった後の老幼婦女だけの避難行は、道なき山野に迷い、目指すハルビンに達し得ず、団長以下多くの傷病死を出して方正街に冬を越して、幾千の難民と共に飢餓と寒さの惨害により皆離散して残留者として憂愁の長年月を過し、老境に入って辛うじて帰国し、私の次弟の護を頼って住み、護没後は寂しく一人暮らす老後となったが、過去の辛酸風雪を思えば、せめても今は平安気楽ですと、静かに語る。このころは、同じ運命に泣いた帰国者仲間と慰問し合うのを生甲斐の如くに行っている。

あたらしい女の生涯を棒に振った不幸を、だれを恨むでもなく堪え忍ぶ生態をあえて強いても評する他に言葉もない。

既に古希を過ぎ、せめて、更に長寿をと祈るのみで

あります。

郡山郷の人々は大半がこのような運命をたどったと聞いています。

(福島県 立花 開)

海外居住の動機

及び海外での生活概況

茨城県 生井 房治

ある人より満州中央銀行の入社試験を受けて見ないかと言われ早速受験したところ合格の通知が届きましたので、郷里の親にも相談し多少の反対があつたが許可を得て、昭和十年三月二十五日東京駅午前十時出発しました。東京駅では茨城県人会及び学校級の連中五、六十人が見送りのため集まっていました。私一人で発つたのではなく星野直樹さんの奥さん及び女中さん、石渡莊太郎さんの弟慎吾さんの四人でした。私の父は星野の奥さんに何かといろいろお頼みしている様

子でした。

三月二十七日夕方午後五時ごろ満州国新京駅に到着、
出迎えに来られた奥山秀和さんのお宅に落ち着きまし
た。

翌二十八日満州中央銀行に出頭して到着を報告しま
した。入社式は四月一日でした。

新京時代

満州中央銀行では、まず新京の四馬路スエーデンにありました
総行営業所、つまり本店営業所の国庫係に配属されて、
奉天新京などにあつた国営競馬場の馬券の収入、彩票
と呼ばれる宝くじの支払い、各省庁への予算令達及び
支払いといったことを担当いたしました。

我々は入行して即戦力にならないといけませんから
ソロバン簿記中国語を早速やらされました。ソロバン
は自分で多少出来る程度でしたが、ほかは全く駄目で
したので、特に中国語は日曜日ごとに新京商業学校の
中国語教室に通いましたし、銀行でも毎朝の一時間、
新入社員のみ簿記と中国語の学習をやらされました。

銀行では二年以内に中国語検定の三級に合格しない

と辞職させられますので、一生懸命やりました。帳簿
付けは順々に習って行きますが、私は最初に計算の方
に回されて、毎日国庫の締めをやらされていました。

本店にいたころ、印象に残っていることは二つあり
ます。一つは国庫係に入つて一か月目のことですが、
ある日の朝十時ごろ突然非常ベルが鳴って私がきよと
んとしている間、国庫係の十五〜六人全員が視界から
消えてしまいました。何のことか分りませんでした。後
で叱られて、馬賊襲来の報知ベルだったと知らされ
ました。これには驚きました。もう一つは取り付け騒
ぎです。銀兌換券の発行に伴つて新旧紙幣交換のため
混乱が起き大行列ができてしまったのです。そこに総
務長官の星野直樹さんが居合わせ、千円以上の交換の
み受け付けるとの指示を出して、やっと解決するとい
うようなことがあつたとききました。

星野さんは交換の金額を高くすることで、集まった
人々が交換する金があると信用して引き揚げることを
見越して指示を出されたのだと思います。

それから同十年の十一月に竜江省の白城子、当時は

洮安と呼んでいましたが、その洮安支行の出張員となりました。所属は総行営業所から総行管理課に代わりましたが、出張員として、各支行の状況やその地方の経済状態全般や政治情勢、そして満州中央銀行が印刷した正式な政府の札の流通状態とその国幣と日本円金票の信用度を調査して本店に報告することを任務としていました。入社して半年しかたっていないのにいきなり外蒙古に近い方の、日本人職員が今まで行ったことのないような所へ行くように命令されたわけですが、しばらく理解できませんでした。

当時の満州中央銀行総裁は満州人の榮厚氏でしたが、その総裁から辞令を受け取りました。本当に突然に重役から早速行って現地の日本札と満州国幣の交換、領事館、満鉄、日本軍隊の給料を満州国幣で満州中央銀行から支払うようにと命じられました。命令と同時にピストルと暗号電報の本一冊を渡されました。ピストルは馬賊の類もおりますので、護身用ということでもーゼル一号という大きくて重いものと弾二百発くらいを渡されました。数回馬賊らしき連中に威嚇射撃に

使用しました。暗号電報は銀行内部だけのものので例えば現金輸送が事前に漏れるとまずいので、サロチなどと書いてあれば五千万円、といった程度の内容でした。私は十一月分の給料とボーナスの先払いを受け、狼の毛皮のオーバーと短刀一本を買って、翌日の夜八時新京駅を出発致しました。日の丸と万歳の声に送られて、暗号帳一冊を抱いて四平街で乗り替えて鉄嶺の方へ少し行ったら突然馬賊の襲来とかで列車は止まる、車内は真暗、日本人は私一人、明け方ようやく発車した。翌日午後六時半ころ三時間半ほど遅れて白城子駅に到着した。昨夜日本人が六人馬賊に殺されたとかで城門の警備は嚴重でした。

洮安時代

洮安という県城は四方を城壁に囲まれていて東西南北に門があり、人口二万五千人ほど、日本人は軍の独立守備隊千八百人ぐらい、満鉄の建設事務所（ハロンアルシャンまでの鉄道敷設工事及興安嶺のトンネル工事）三百人程度おり、領事館もありました。私は洮安支行に寝泊まりしてその翌朝満鉄事務所、独立守備隊、

領事館と強引に日本円と満州国幣を交換し、尚今後の俸給その他の支払いは全部満州国国幣で支払うよう交渉相成り、例の暗号電報で交換完了の打電をいたしました。同時期に出張員を命じられた中で私が一番早かったということですから、これでも順調にいった方でしょうか。私はこの洩安では一年後に辨経理（支店長代理）に任命されました。

私は農村に対する農地担保の貸付金（春耕貸款）の金利徴収元本の回収に努め、成績極めて良好に運ぶ。

また、秋の農産物の買い付け資金の貸出は徹底して便宜を図り、従来の数倍の貸出しを實行し、各県の県長を紹介人と定め金融機関のない県域にも出張貸付けを實行した。

人員も増え行舎社宅も近代風に立派な新築で成績優良店として表彰を受けた。

白城子で忘れ難いものは葛根廟のダライ・ラマ法王である。毎年四月十五日には葛根廟でラマ僧の跳鬼ラマ跳びがある。四メートルくらいの車付きの大喇叭が出る。

ダライ・ラマ法王第十三世、年齢は四十歳ぐらいで顔色優れず優しい静かな法王である。私がいともあいさつすると、ラマ寺は生活が苦しい満州中央銀行で何とかならないかと持ちかける。

ある年日本人でラマ跳びを是非見たいという人が多いので特別に一月遅れの五月十五日に日本人のために興業したことがあった。その時独立守備隊長も参観した。ラマ法王に案内してくれというので係を通じて面接したことがあったが、四部屋ばかり続いた一番奥の部屋に椅子に正座して前に隊長を呼びつけ、まずお前は年令はいくつか、次に月給はいくらか、何をしているか。そしてからいつものようにラマ寺は経済的に苦しいから何とかならないかという話であった。通訳に尋ねたら年令月収などを尋ねるのはラマの習慣らしい。相手の地位を知り、失礼にならないために尋ねるらしい。それから半年ばかりで法王は亡くなられた。全身に金箔を塗って永久保存するそうである。

第十四世はその内見つかるだろう。過去のことを何でも知っている男の子がどこかにいるはずである。そ

れが見い出された時に第十四世にならるとのことです。

白城子で忘れがたいもの その(二)

ボクシングのことです。まだ出張員の身分だったころ朝鮮人興業拳闘会という巡業が白城子に来て飛び入り大歓迎という張り紙があるので申し込んだところは非お願ひしますというので、私はキャプテンとしかやらないからというとうとうとそうしますというので私の名刺を置いて来た。銀行の生井さん飛び入り試合申し込みと電柱公告に張り出したので街中大騒ぎであった。日曜日なので兵隊さんなどもたくさん顔を見せた。行きつけのカフェーなどでも繰出で来る騒ぎ。私は前日テニスの練習中誤って肩を割り血が止まらないために眉毛を剃り絆創膏で止血めをして出た。小物が三組とも三回戦まで行って終わった。いよいよ日本人と朝鮮人の決闘だ。一回戦の背の高い朝鮮人は私の肩ばかりねらうので顔中血だらけになる。血が目に入り見えなくなつて分が悪い。七・三で負けたようだ。二回戦は早く勝負をつけねばまた見えなくなる。肩をねらつて来

る所を飛び込んで大きなアップercut一発で脳震盪を起こしたらしく立ち上れない。本日の勝負は終わった。血だらけの日本人ここにありとして北満日報に載ったとか本店の人事課は知っている。以来暴れる朝鮮人が少なくなったとか。

国境の街孫呉

新たな任地での私の職務は黒河支行辨経理兼孫呉辨事所主任ということで、いわば黒河支店の孫呉出張所主任です。この孫呉は軍事の拠点で一時は軍隊が六万五千人もいた場所でした。それに伴って軍関係の工事が多く、中国人労働者が多かったため、彼らが送金するための事務をかなりやり、メインは軍の資金を保管することにありました。ですから我々も孫呉では軍属になったようなつもりで働いておりました。しかしソ連との国境の街であるため、いったん戦が起ると困るので貸付業務は行ないませんでした。

孫呉におります時に二つの事件に遭遇しておりますが、その一つはノモンハン事件です。昭和十四年にこの事件がありました。その時は夜の十二時半に突然

銀行に憲兵が来て、八百五十万円もの大金を持って行きました。おそらく軍費にしたものと思います。すわ、戦争ということで、この孫呉は国境の街ですから、侵入に備えて銀行の建物を改築し、逃げる場合を想定して金券を燃やす焼却炉と灯油多数を準備しました。そんなこともあって、日本人はいつ逃げ出すのかと満州人も心配になって、毎日銀行をのぞきにきておりました。事件後に兵士が街に帰って来ましたが、負け戦だったからなのか、皆泣いて悔しがっておりました。

もう一つの事件は、関東軍特種演習、いわゆる関東特演です。昭和十七年だったと思いますが、私はたまたま二か月の休暇をとり結婚かたがた内地に戻って、郷里や北海道に行っておりました。結婚話が決まりかけたところで、満州から至急戻ってこいという電報で孫呉に帰ってみると、その関東特演だったというわけです。ともかく孫呉というのは軍隊が多く、軍事的緊張が続きました。特にソ連との国境近くで監視が厳しいところでしたが、その分治安は良いところで、私も民間の立場から県連の議長として町の安定に協力致しました。

そのことで満州国建国十周年記念式典に際して、記念品を添えて建国功労賞を授与されました。

銀行の業務も順調に運んでいましたが、ある時出納上の大きなミスがあり、私は行員から罪人捜しをして、日本人行員と満人行員の間を険悪にしてはいけないと思ひ、本店から検査が来た時も罪人を出さないように気をつけた。

家族状況

満州国孫呉において結婚生活始まる。

昭和十五年十月末、あまり希望しない結婚であったが、上司の勧めにより新京やまとホテルにて結婚式を挙げた。翌十一月一日夜八時、新京駅発列車で孫呉に向かう。十一月三日夕方四時孫呉到着、ホテル別館にて新婚生活に入る。十一月五日、嫁入り衣装など孫呉駅到着、引き取って四畳半間の押し入れに納める。夜中、ザワザワという音に目を覚まし、裏方の戸を開けた途端、四畳半間は火の海であった。「火事だ、早く逃げろ」と新妻を起こし、私ははだして表に飛び出した。あまり冷たいので部屋に戻り下駄を履いて、隣合わ

せの部屋の奥さんに、「私の家が火事だ、至急逃げて下さい」と叫んだ。一回りして火事を知らせ我が家に戻って来たら、玄関からは入れないほど火が回っていた。妻はうろろる表の庭に立っていた。消防車が来た時は、家は焼け落ちていたが、消防士に私の洋服をつるしてあるあたりを、特に消すようにたのむ。大分下火になったので、苦力を五人ほどたのんで、私の洋服のかかっていたあたりを中心に、金庫の鍵があるはずだから、それをとにかく捜させた。この鍵が見付からないと、銀行の金庫が開かないので心配である。同じ場所に金鎖もあるはずだ。百グラムの金鎖である。金庫の鍵は苦力が拾ってくれた。まず安心した。金鎖は私個人の物ゆえ、見付けなくとも構わないとあきらめた。

私ら夫婦は、手ぬぐいもなく、靴もなく、洋服もない、金もない。金庫の鍵が見付かったから、銀行の営業には差し支えない。とりあえず、夫婦で孫呉ホテルに逃げ込んだ。部下の洋服を借りて銀行に行く。妻はホテルの娘さんの着物を借りて茫然としている。警察

から電話が来たので行ってみると「家の責任者は生井さんですか」「そうです」失火罪の嫌疑で調べる必要があるという。一晩くらは泊ってもらいたいが、写真だけでも撮らして下さいと言うから写真だけなら、胸に木札を掛けて写真をとられた。

保険会社が来て保険金として八千円を置いて行った。一万円の保険だけ加入してから半年以内ゆえ八千円しか下りないとのこと、類焼した三軒に各二千円ずつ見舞金として贈り、残り二千円は三台の消防ポンプ（町の商店会のポンプ、日本軍のポンプ、駅の満鉄ポンプ）及び警察の方に慰労会の酒代として贈った。

ホテルは一泊十八円二人で三十六円である。妻の嫁入り衣裳、持参した財産、私の洋服や靴、ハミガキなど金はいくらあっても足りない。本店に電話して最大限貸してもらいたいと申し込んだ。互助会が二千九百円貸してくれた。私の実家から一千円送って来た。間もなく孫呉支店及び行員住宅も完成するから一息つけると思った矢先妻が北孫呉陸軍病院で診察を受け急性気管支炎とか、急性肺炎とか診断されたから早く東京

に帰りたい、こんな寒い所には住めないと言い出した。元来蒲柳の質だから仕方がないと思った。

十二月半ばころ黒河検事局より取り調べの必要あり何月何日出頭せよとの通知が来た。

私は電話で出頭出来ない。この年末の多忙時季に調べる必要があれば検事局の方から当方に出張すればよいと。私はあの建物に暖房を入れる前に暖房設備の不備に付いて建築技師に点検してもらったため二度とも瑕疵無しの判定をもらっている。私らの損害はだれに向かって述べんと言いたくなる。家主の責任はどうか。一か月ほどしたら、検事局より不起訴処分にしたとの通知があった。何しろ酷暑零下五十二度である。

再び新京へ

昭和十七年孫呉から本店に呼び戻されて管財課に勤務することになり、いきなり大きな仕事に関わることになった。新京の大地主崔宇庭という人が官銀号時代に二十七万円で質入れた土地を、取り戻したいという事件である。新京駅前大通り関東軍司令部、忠霊塔、

銀行会社、ホテル及びデパートなどの中心部を含む大部分の土地である。崔は弁護士、家令を引き連れて度度交渉に来たらしい。質入れ土地は当然返還すべきであるとの稟議書を書いて提出したところ予想通りこれでは駄目であると返却された。逆の稟議書を書いて欲しいというので質入れして満十年経過した、翌日「未だ現金の提示無く」の一文を書き加えて稟議書を逆転させた。但し質入れ金額の一割、金二万七千円也を戻金として支給することに決した。管財課総務主任となり、社宅、寮、厚生施設、中銀クラブなども管理致しておりましたが、興農金庫創設に伴い、社命により昭和十八年興農金庫に転じ、副参事厚生課調査役となる。社員の福利厚生及び、在郷軍人関係なども担当致しております。診療所の設置、内地から医師の採用。健康保険制度の確立。各支店毎の囑託医の契約、各職員家族に対して取扱いの徹底、なかなか複雑多忙である。大連港に入るドイツ船からの高貴菓の買占め、食糧品配給の買占め、在郷軍人の訓練、軍事講話の実施、関東軍からの囑託大尉の雇入れその他男女体育訓練に

多忙である。

一時帰国

昭和十九年十一月二度目の結婚のため一時内地帰国する。併せて東京駐在員事務所開設準備、及び官庁、会社厚生省関係調査のため東京に出張する。途中大連の信濃屋旅館に立寄る。独逸船より購入した高価菓の保管状況を調査確認し、異状なし、又東京にて朝鮮銀行本店にて田中鉄三郎総裁に面会し、銀行の戦時下福祉厚生対策について調査し、続いて日本銀行本店営業部にて同様に調査した。

日本銀行には戦時特別福祉係があるようであった。配給品など毎月あるとのこと。羽毛布団など、高価な物が売れ残る。私が引受けた。

故郷に帰り一番喜んだのは母である。会えないと思っていた息子が帰って来たと、涙を流して喜んだ。歯科医に行く。駅員に、お婆ちゃん切符はと聞かれると後から息子が持って来る。と、どんどん構内に入る。一月になり魚が食べたい。みかんが食べたいと言うから熱海に行って瓦文という人に頼んで網を引かせた。

途中米軍飛行機が飛んで来たので逃げたから魚はあまり取れなかった。みかんも二十個ばかり手に入ったので母の要望に間に合って安心した。

それから今日仲人が持って来た嫁の話、良さそうだからというので、それに決めようと返事をしたので母も安心したらしい。一月の末には病床に付き二月二十八日に亡くなった。安心した顔である。

三月九日、私の結婚の日である。配給の酒で形ばかりの結婚式を挙げた。三月十日二人で妻の実家へ里帰りである。東京がアメリカに爆撃されたとのニュースが入る。昨夜の大宮の火事は東京爆撃のことかと思つた。南の空が赤かった。妻の実家に着く。ご馳走になる。私は東京に行き、満州行の切符を買うつもりである。

東京行は二、三日待つて明日は水戸市内の見物でもしたいというのでその言に従つた。

三月十一日、水戸市内見物より戻ったところ妻の両親が支関にて娘を満州に連れて行くならこの結婚は離縁にする。娘を殺す訳には行かない。この戦争は日本

が負ける。満州に行けば二度と帰って来られない。今日家族会議で一決したのであるとのこと。

私は別に意に介しなかった。東京に行かずに自分の家に帰って来た。

三月十二日、満州の次兄夫婦が一家五人で帰って来た。内地で四人目の子を産ませたかったのである。東京は大変な騒ぎであると語る。上野公園は死体の山である(一夜に十万人も殺されたのであるから)

長文の電報で、切符が買えない、と満州と交信した。日本銀行を通じて下関及び新潟の連絡船の有無を調べてもらったが、いずれも良い返事がないようであった。止むを得ない。東京行の切符さえ容易に手に入らない状態である。

四月五日初めて東京に行く。大空襲後約一か月も経っているが浅草隅田川の両岸に水死体がごろごろしている。満潮になれば浮かぶ。引潮になれば土手にへばりつく状態である。

関東軍経理部より軍公用帰満証明書が届く。又陸軍省軍務局軍務課より「右者緊急要務ノタメ新京関東軍

司令部ニ出頭ヲ要スルモノナルコトヲ証明ス」昭和二十年四月十九日の証明書届く。この証明書を持って近隣の駅、東京上野駅、陸運局へ行っても切符は買えない。

次兄生井重のところに関東軍司令部より入隊通知が出て兄は臨月の妻を残して満州に入隊した。三十八歳である。船がないとかでなかなか出発出来なかったらしい。

六月十九日姉が出産した。男児である。私が勲男と命名した。

六月二十三日父が脳溢血で倒れる。満州の二人の息子に会えた満足と二人ともまた満州に帰る寂しさと複雑な気持ちでこの世を去ったであろう。私は長兄と共に今日は最後の麦コギである。朝から張り切っていた。夕刻六時ころ孫を負ぶって帰って来た。散らばった麦の穂を掃き集めていたが、突然孫の泣き声があるので横を見たら父が孫を負ぶったままうつぶせになって倒れていた。背中で孫が泣き出したのである。私は慌てて負い帯を解き孫をおろして父を見たら地べたに顔を

つけていた。只事ではないと直感した。兄と二人で静かに縁側に運ぶ。父は小さな声でうわ言を言った。姪とか兎とか少年時代の山遊びであらう。私は村で只一人の医者呼びにはだして駆け出した。途中で近所の人に会ったので私の父が今脳溢血で倒れたから、その自転車で医者を呼んで来てくれと頼んだ。父は大きな軒をかいて眠る。我らが少年のころ、常に八十キロを下らない。気丈肥満の父であったが、どこへ出掛けるにも立派な鞍を置いて馬上豊かな父であったが遂に眠る。

戦況

戦況ますます衰えるばかりである。米軍の発表通り艦砲射撃により日本の都市が潰滅する。沖縄も戦艦大和も無意味である。

九段横の満州中央銀行宿舍に一泊する。隣は山階鳥類研究所、向かいは道路一つ隔て靖国神社の遊就館である。アメリカ軍の爆撃があった。頭に帽子代りに座布団を縛り付けて走り出した。前の遊就館は爆弾で盛んに燃えている。機銃掃射の音がする。飯田橋土手の

方へ走り出す。土手の所で一休みしていると、又機銃掃射の音がする。飯田橋駅方面に向かって走り出した。追風であった。付近住宅の火事の火の玉が続々と我らを追いついて広がって行く。靴が熱くなる。靴の縫目の糸が焼けるのであらう。靴が破れる。はだして走ることも出来ないので手拭を裂いて靴を足に縛りつける。飯田橋駅前にたどりつくときが人がごろごろしている。鉄道病院かどこかに運んで行く、看護婦が一人で受取るのでなかなかはかどらない。廊下に人が置いて道路に飛び出し足許のけが人を再び病院に贈り込む。

病院の向かい側の万年筆屋にて休み、又敵機が来るらしいので、裏口より逃げ出した。敵機が頭上に迫ってきた。慌てて靖国神社の方向に走り出した。靖国神社の奥殿も燃えたようだ。一ツ橋方面より二重橋に回る。被害はない。

終戦

昭和二十年八月十五日午後三時ころ小学校四年生の甥が学校から帰って来て戦争は終わったと言う。そんな馬鹿なことあるか。校長先生が言ったのである。半信

半疑である。農家ではどこの家でもラジオは故障でニュースが聞けない。下館の街の親戚までラジオを聞きに行ったところ、本当に負けたいらしい。降伏したらしい。翌日東京に行く。下館駅で乗車したが降伏らしい。誰も語らない。小山駅で上野行に乗り替えた。

デッキのところに立っていると誰も下を向いて語らない。ひとり朝鮮人らしい男が高笑いしたりして語っている。上野に着くまで語らない。どこへ行くのか自分でも分からない。東京駅で降りた。とにかく宮城へ行く。行けば何とかなるだろうと。多くの人と出会う。誰も宮城に集まるのか。宮城前の広場には、団体、個人、会社グループなど、大きな声もない。一礼して帰るようだ。泣いてる人もいる。両手をついてる人もいる。男が多い、女が少ない。私は陛下が御健やかにと祈るだけである。

それだけが心配だ。涙を拭いて帰りかけた日本橋の日本銀行本店に行く。営業所に人影もない。廊下をのぞくとひとり女の子が歩いているだけである。寂しくもない。黙々として駅に戻ってくる。

十條の医師藍田寛様宅に泊まる。自分が昔中学三年まで訓育を受けた先生である。困った時の精神のよりどころである。先生は近衛公と血縁の人と聞く。国家の一大事には皇室と相通するものがあると思う。米三升は持参した。

二階の部屋に通された。泣けて泣けて仕方がない。久し振りの対面である。昭和二年二月大正天皇の御大葬の時である。私は目白中学一年生の時、柏原文太郎校長より目白中学を代表して御大葬に参列せよと胸にかける木札を渡されたが、おそれをなしてしりごみをしていたのを藍田先生に知れひどく叱られた。首から掛ける大きな木札に、茨城県平民井房治と筆太に書いてくれたのを思い出した。藍田先生が柏原文太郎校長に交渉して、私を列席せしめたのだろうと初めて気が付いた。当時東京都に中等学校六十五校あり御大葬に列席したのは私一人あとは学習院中等部から一人と計二人だけだったので。

生活安定までの苦勞

終戦までに両親を亡くした。又若妻二人とも別れた。

満州からは金は一銭も来ない。今まで月に一度は東京に行った。行く度に白米三升ぐらい手土産に持参した。その度に非常に感謝された。又白米の注文をされたこともある。これを繰り返せば汽車賃ぐらいは何とかなるだろうと思いつき、試しに実行した。ある医者のお奥さんのところで、いくらあってもよいから持参願いたいと頼まれたので勇気が出た。汽車賃どころか日当にもなる。その奥さんが近所親類に分けるらしい。話を聞いて見ると私の米の値段は大変安いらしい。別の所に持って行ったら大歓迎である。このようにして米を東京に運び帰りに日用雑貨を購入して帰る。往復商売を次第に広げ、連日東京往復するよう努力したのである。しかしこれには米を集める下働き、又東京より仕入れた物品を届けるもの、注文を取る者、販売する者など、三人、五人と増員する必要も生じ、見込み仕入品も多くなる結果、委託販売組織となる。又、品によっては違法なる物品も取扱わざるを得なくなる。例えばたばこの巻紙のようなものまで手を出すようになる。露天商の物品販売でも取締りの対象になるものも

多く、又、米そのものも次第に嚴重になる。販売品そのものも正当な経路を通って来たものか、ヤミ物資なるものか倉庫番人の盗品なるものか、横流し品なるか値段の上下差のあるもの、数量に制限あるものなどなかなかかむずかしい。正当なる商品は利益は薄い。最後の仕入れと思いい、全財産を持って東京に行く。上野駅で下車したところ上衣の内ポケットに入れた財布がない。全財産が盗まれた。上衣の上から鋭利な刃物で切り取ったものである。大宮で米の一斉取締りがあり、車から降ろされたり、乗せられたりしたときに掏摸に遭ったものと思う。切符だけは別に持っていたので助かったのである。警察に届けても金が返るとも思えないので、そのままにした。万事休すである。

【執筆者の横顔】

生井氏は茨城県下館市の市民、その昔村長をしていた旧家に生まれた。中央大学法律科を卒業して大蔵省に採用された。

もとより彼は外地志向型だったので大蔵省を辞し、

星野直樹（満州国総務長官、のちの東條内閣書記官長）の推薦あって、昭和十年満州中央銀行に起用されて中央勤務から三か所の地方支店を転々として勤務した。

清廉にして直情、青竹割ったような気性であるが、人情豊かで涙もろいところのある人物である。

満州国に十年間勤務している中で、常人にはなし得ないと思われる難題に当たってこなした。

一つは、蒙古地区のハイラル支店及び洮安支店にいたころ、金融と流通施策について、旗参事官と相計り、畜産振興に協力して徳王始め民心安定に寄与したこと。

次は、新京駅の付近一帯の地主は、崔宇庭が官銀時代に二十七万円で質入れた土地を、とり戻したいという提訴があって満州中央銀行は困惑した。その時、生井氏は管財の総務主任として、稟議書をもって崔宇庭氏に懇請し承認をとりつけたこと。

その次は、孫呉支店長時代、ノモンハン事件で官民協力して生まれた団体の議長として物心ともに日満両軍に援助活動を実行したことなどなどである。

彼は、これが正しく是なりと信じた際は水火を辞せず猪突猛進する型の人、満州から引揚げて、あるものはこれ一つだけだと、満州建国功労章を示す八十歳とは感じない意気軒昂、呵呵大笑するさむらいである。

（他）引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

無条件降伏の陰に

栃木県 岡村 善四郎

若人には夢がある。青春の血潮を燃やしながら進む若人の前に苦難の壁は無い。若人は大志を胸に黙々と夢を追い未知の世界へ夢を広げ留まることを知らない。昭和七年暮、私はいつものように新聞を読み出した。何新聞だか広告欄に変わった広告を見付けハッとしたり読み返す内に熱気が体中を駆け回るような衝撃が起こった。秘かに求めていた希望の光をそこに見つけ出したのです。